

研究ノート

現代英語教育における「国際語」としての英語の導入

—非母語話者によるアクセントのある英語の聴解—

井 上 彩

要 旨

大学における英語教育，ことに，英語によるコミュニケーション能力の育成を目的とする英語の授業においては，非英語母語話者同士の英語によるコミュニケーションを想定できるよう，いわゆる「国際語」としての英語（English as an International Language, EIL）の役割を学生に示すことが重要である。学生が卒業後に実際に英語を使用する機会がある場合，多くの場合においては非母語話者による英語に接することになるであろう。しかしながら英語教材の多くは標準アメリカ英語またはイギリス英語を使用しており，それ以外のアクセント，ましてや非母語話者による英語を聞くことはまれであるかほとんどないというのが現状である。本稿では現代英語教育における「国際語」としての英語の導入の一例としての聴解アクティビティーを紹介する。非母語話者の発音を用いたリスニング教材を使ってアクセントのある英語の聴解に慣れることを目的としたアクティビティーであり，またそれが学生にどのように評価されたかにも言及する。

キーワード：国際コミュニケーション能力の育成・「国際語」としての英語・非母語話者の発音・リスニング教材・授業アクティビティー

1. はじめに

現在英語でのコミュニケーションのうち80%がノンネイティブ・スピーカー、すなわち、英語を母語としない話者間でのコミュニケーションだと言われている。非母語話者による国際語としての英語が発達し、その役割を増すとともにその英語教育に及ぼす影響も大きくなってきている(矢野 2004)。日本の大学の現代英語教育においても学生が卒業後に英語の母語話者だけでなく、第二言語としての英語話者とも英語を使ったコミュニケーションができるよう、いわゆる国際語としての英語(EIL, English as an International Language)の役割が重要視されてきている。「国際語」としての英語という概念に関しては、そのリング・フランカとしての役割よりもむしろ、現在の標準英語の言語体系そのものへの変化(不規則動詞を規則動詞にする、発音と綴りを一致させる、など)を想定するSimplified Englishという概念と同様の意味で用いられることもあるが、本稿では一貫して、習得を目指すべき規範としての標準英語に相対する概念としての、「非母語話者同士でまたは母語話者と非母語話者との間のコミュニケーションで実際に使用されている英語」、という意味で用いる。

現代は人の移動、経済のグローバル化、またインターネットの普及などを原因として英語話者の拡大、英語の多様化が進んでおり、このため英語による国際コミュニケーション能力の育成のためには日本人以外の非母語話者による英語の聴解に慣れる機会があることが大いに望ましい。しかしながら日本の社会では、特に大学生の生活圏では日常的に英語を使用する機会は少なく、非母語話者による英語の発音を耳にする機会はほとんどないというのが多くの学生にとっての現状であろう。また大学生のための英語教材では近年非母語話者による英語を扱うものも出てきたが、その数はまだ多くなく、今後の活発な開発が待たれているところである。本稿では非母語話者による英語を使用したリスニング教材を使ってのアクティビティーの一例を紹介し、また最後にそれが学生にどのように評価されたかにも言及する。

2. リスニング教材

ここで紹介する教材は、英語によるコミュニケーションを目的とした大学の授業(「英会話」「英語コミュニケーション」「英語リスニング」などの科目)で用いることを想定して作成した。授業時間のうち少なくとも30分から40分ほどを使うことを前提とするアクティビティーである。英語のアクセントの記述を目的としたウェブサイトが公開している録音サンプル(音声ファイル)を利用している。普段行っている授業の合間に単発的に実

施できるような分量・内容のアクティビティーとなるように考慮した。英語専攻でない学生が使用することを前提として準備したが、英語専攻の学生、特に英語教育専攻の学生にとっても指導・解説によってはより英語に関する興味と理解を広げることのできる内容ではないかと思う。以下、リスニング教材を使つてのアクティビティーの目的、教材の内容の紹介、アクティビティー実施の手続と指導内容について順に説明したい。

2.1 アクティビティーの目的

当アクティビティーの目的としては、第一に、学生に非母語話者によるアクセントのある英語の発音の特徴に馴染んでもらうことにある。同じ英語のパラグラフをドイツ語、北京語などいくつかの違った言語を母語とする話者が読むのを聞いて、ネイティブ・スピーカーとは英語の発音自体も、またリズムやイントネーションも異なっているということを感じ認識してほしい。気軽に楽しみながらゲーム感覚で非母語話者による英語を経験できるように、アクティビティーの後半はクイズ形式をとっている。

2.2 教材の内容の紹介

非母語話者による英語の発音のサンプルとしては、George Mason UniversityのSteven H. WeinbergerによるThe Speech Accent Archive(以後、本稿ではSAアーカイブと略称する)が公開している音声ファイルを使用した。SAアーカイブは様々な英語のアクセントを記述・保存するために同一のパラグラフ(Elicitation paragraph)を様々な言語の母語話者が読み上げたものを公開している(2010年9月現在1366のサンプルがある)。英語の母語話者によるものと非母語話者によるものの両方が集められている。話者の出身地も多様である。SAアーカイブはそれぞれの話者の母語だけでなく、出生地、英語以外に話すことのできる外国語、年齢、性別、英語学習を始めた年齢、英語習得の方法、居住した英語圏、英語圏での滞在期間などの情報も記録してあり教材として適当なものを選択・使用する際にとっても参考になる。SAアーカイブの作成した英文のパラグラフは69語からなる短いパラグラフではあるが、標準アメリカ英語に存在するほとんどの母音・子音・連続子音を含むようにデザインしてある。よつてこのパラグラフを使用することによつて一度のアクティビティーで英語のほとんどの音に接することができるという利点がある。以下、英文パラグラフの全文を載せる。

Please call Stella. Ask her to bring these things with her from the store: Six spoons of fresh snow peas, five thick slabs of blue cheese, and maybe a snack for her brother Bob. We also need a small plastic snake and a big toy frog for the kids.

She can scoop these things into three red bags, and we will go meet her Wednesday at the train station.

“Slab”を除いてはほぼ使用頻度の高い基礎的な語句のみで構成されているパラグラフで、英語を専攻としない大学生のための教材としても適切であると言える。また文脈も専門的でなくどのような情景か想像しやすい平易なものであろう。下の表はそれぞれの英語の子音・母音・連続子音がパラグラフに何度現れるかをまとめられたものである。

The Sounds in the Elicitation Paragraph (numbers indicate occurrences)

single consonants		vowels	clusters	
initial	final		initial	final
k (3)	z (5)	i (12)	pl (2)	sk (1)
t (3)	l (4)	ɑ (4)	st (4)	ŋz (2)
ð (6)	ŋ (1)	ɛ (4)	bʃ (2)	ks (1)
θ (3)	θ (1)	æ (10)	fʃ (3)	nz (2)
w (5)	m (1)	ɪ (11)	sp (1)	bz (1)
s (2)	ʃ (5)	ʌ (2)	sn (3)	nd (3)
f (3)	v (3)	ə (10)	sl (1)	dz (1)
tʃ (1)	ʃ (1)	u (5)	bl (1)	gz (1)
n (1)	k (4)	oʊ (3)	sm (1)	
b (3)	b (1)	aɪ (1)	sk (1)	
l (1)	d (2)	eɪ (5)	θʃ (1)	
ʃ (2)	g (2)	ɔ (3)	tʃ (1)	
d (1)	n (4)	ɔɪ (1)		
ʃ (1)	p (1)			
g (1)	t (2)			
m (2)				
h (4)				

表は Speech Accent Archive の The Sounds in the Elicitation Paragraph をそのまま掲載したものである。一般的に英語の学習者にとっては習得の難しい歯間摩擦音が5回現れているし、また開音節の多い日本語の話者にとって難しい連続子音も数多く現れていることがわかる。

学生に配布するハンドアウトにはこのパラグラフの一部の単語を空欄にしたものをのせる。最初の設問は英語の非母語話者がパラグラフを読んだ録音を聞いて空欄を補充するというものである。実際に使用したハンドアウトの内容を下に挙げる。空欄は五つ設けて、それぞれにヒントとなる質問を付け加えた。非母語話者による英語の例としては6人の話者による音声を選択して使用した。6つの母語を選択する際には以下のことに考慮した。まず、「国際語」としての英語の世界での使用領域が反映されるよう SA アーカイブにある

現代英語教育における「国際語」としての英語の導入

サンプルの中から、なるべく多様な地域からの言語を選ぶことが望ましい。しかしながら、日本の大学生に第二外国語として学習されることが多く、また比較的身近だと感じられているであろう言語、また学生が将来仕事や留学などにおいて接する可能性の高そうな言語であることも考慮に入れて5つ選んだ。また、SAアーカイブにはそれぞれの言語（話者の母語）につき複数の録音があるが（例えば日本語が母語の話者に関しては12の録音が存在する）、その中で発音が英語のネイティブ・スピーカーに近すぎず、かといって遠すぎないものを選ぶようにした。ネイティブ・スピーカーとあまり変わらないような発音であると、「国際語」としての英語に触れるというこのアクティビティーの目的に沿わないし、また母語の音韻的影響（いわゆるアクセント）がとても強いものだと、学生にとって英語を聞き取るのが難しくなる可能性があるからである。結局このリスニング教材のために選んだのはドイツ語、フランス語、中国語（北京語）ヒンディー語、ベトナム語、を母語とする5人の話者による英語の発音である。また、日本語話者による英語も含めたため合計6人の話者に接する。今回は時間の制約上使用しなかったが、韓国語、スペイン語話者のものも教材として使用するのに適当な録音があった。アクティビティーにもっと多くの時間を割くことができれば韓国語話者、スペイン語話者の英語を含めるとさらに充実したアクティビティーになるであろう。学生に配布したハンドアウトは以下の内容を含む。

Speakers of different native languages read the following same passage. After listening to the recordings, fill in the blanks 1 through 5. Can you distinguish their native languages?

Please call Stella. Ask her to bring these things with her from the (1): Six spoons of fresh snow peas, five thick slabs of blue cheese, and maybe a snack for her (2) Bob. We also need a small plastic snake and a big toy frog for the kids. She can scoop these things into three (3) bags, and we will go meet her (4) at the (5)().

- 1) From where?
- 2) For whom?
- 3) Which color?
- 4) When?
- 5) Where? (2 words)

Recording 1	[]
Recording 2	[]
Recording 3	[]
Recording 4	[]
Recording 5	[]
Recording 6	[]

Materials from *the speech accent archive*, <http://accent.gmu.edu/index.php>

リスニング教材として使用した6つの録音について、話者の母語、出身地、主な発音上の特徴を以下に挙げる。括弧内の言語名と数字はSAアーカイブで使用されている、サンプルの母語とする言語ごとの識別番号である。

録音1	ドイツ、デュッセルドルフ出身の女性ドイツ語話者 (german 1) ([r] の音が口蓋垂音に、歯間摩擦音が歯茎摩擦音になる特徴が見られる)
録音2	日本の東京出身の男性日本語話者 (japanese 4) ([ɹ] が [r] に、歯間摩擦音が歯茎摩擦音になり、母音挿入が見られるという特徴がある)
録音3	フランス、ニース出身の女性フランス語話者 (french 3) (帯気音の消失、語頭の [h] の音の消失、長母音の短母音化が見られる)
録音4	中国、北京出身の女性北京語話者 (mandarin 5) ([w] の音の両唇摩擦音化、[h] の音の軟口蓋摩擦音化、歯間摩擦音の歯茎摩擦音化などの特徴がある)
録音5	インド、マハラシュトラ州ナグプール出身の男性ヒンディー語話者 (hindi 1) ([w] の音の両唇摩擦音化、[r] の音は震え音に、帯気音の消失、反り舌音といった特徴が見られる)
録音6	ベトナム、ホーチミンシティ出身の男性ベトナム語話者 (vietnamese 2) (語末の阻害音の無声化、歯間摩擦音の破裂音化、長母音の短母音化が見られる)

2.3 アクティビティーの実施方法

ハンドアウトを配布し、学生に母語の異なる6人の話者が同じパラグラフを読んだ音声ファイルを聞くことを伝える。まずは空欄に発音された単語を聞き取って入れる課題を行うように指導するが、それと同時に、話者の母語が何語であるかを推測してみるように言

う。6人の録音を一通り聞いた時点で、まず、空欄補充の課題が出来たかどうかを確認してみる。比較的容易な単語ばかりなのでほとんどの学生が正解を出せたようである。この空欄補充の課題は非母語話者による英語のディクテーションを目的としている。正解を確認しながら、非母語話者の英語であっても問題なく英語を聞き取ることができ、また理解に問題がないことを確認する。

次に、パラグラフの例文を一文ずつ読んで訳をしながら意味を確認していく。学生にとって難易度が高いと思われる語彙（例えば“slab”）に関してはこの時点で説明を加える。私が実施した時には“snow pea”や“scoop something into ~”といった語句についても説明を加えた。

パラグラフの説明が終わったら二つ目の課題へと進む。次の課題は6人の話者の英語を聞いて母語を当てるクイズ的なアクティビティーである。それぞれの話者の母語、すなわち第一言語は何語だと思うか、という二つ目の課題の意図をもう一度確認してから再度録音1から順に音声流す。私がこのアクティビティーを実施した時はこの課題に移る時点で、正解である6つの母語を順番に入れ替えて選択肢として黒板に書いて、その中から選ぶよう指導したが、まったく選択肢を与えずにやってみよう指導してもよいであろう。この時点で、それぞれの話者の録音を聞いた後で表に挙げたような特徴的な発音を指摘してみた。例えば、ドイツ語母語話者による[r]の音の口蓋垂音化、フランス語母語話者による発音に関しては、語頭における[h]の音の脱落、日本語母語話者による歯間摩擦音の歯茎摩擦音化、などである。第二外国語としてこれらの言語を学んでいる学生にとっては場合興味深い現象であるだろう。発音上の特長を説明する際にはなるべく音声学の用語を用いずに説明するよう努めた。思うに、「国際語」としての英語、非母語話者によるアクセントのある発音についての理解を深めることは、標準英語の音声のより実際的な指導に関しても役立つのではないだろうか。非母語話者による特徴的な発音を意識して聞き、対応する標準英語の音と調音の位置・方法がどのように違っているかを理解することは学生の標準英語の音の体系的理解を深める一助となるのではないかと思う。

クイズ形式の課題の答え合わせは、学生をランダムに当てて推測した母語を発表させたり、また学生の積極的な発言・コメントを促しながら行った。また、複数の学生によって異なる推測があった場合は「X語だと思った人は?」「Y語だと思った人は?」などと全員の挙手をつのり学生の反応を見ながら進行した。学生の挙手によっての判断であるが、ほぼ全員の学生が日本語話者による録音を正しく推測することができていた。また、ドイツ語、フランス語話者に関しても正答率が高かった。北京語、ベトナム語については、どこかで聞いたことがあるような気がするアクセントだ、という意見が多かったが正答率はあまり高くはなかった。ヒンディー語が一番難しかったようである。

3. 学生の評価

授業の後で授業内容につき、1. Interesting (おもしろい, 興味深い), 2. Useful (ためになる, 役に立つ), 3. Difficult (難しい) の三つの項目についてどの程度そう思ったかを1から4のスケールで評価をしてもらった。評価1は not much (あまりそう思わない), 2は OK (まあまあそう思う) 3は good (かなりそう思う) 4は very (とてもそう思う) である。当該アクティビティーの評価としては、1の Interesting の項目につき高い評価を挙げる学生が多かったのは予想通りであったが、2の Useful の項目に関しても同様に高い評価がつき、学生側の非母語話者による発話を理解することの必要性・国際語としての英語の役割に関する意識が高いことをうかがわせる結果となった。3の Difficult については、後半の母語をあてる課題が難度が高かったこともあってこれも「かなり難しいと思う」、または「とても難しいと思う」、と答えた学生が多かった。

4. 問題点と今後の課題

教材の問題点としては、パラグラフの適切性があげられる。今回はSAアーカイブが公開している音声ファイルをリソースとして利用したが、このSAアーカイブの目的は様々なアクセントの音声を記述・保存することにあるため、パラグラフは標準アメリカ英語に存在するほとんどの母音・子音・連続子音を必ず含むようデザインされている。これは、短いアクティビティーの中で英語のほとんどの音に接することができるというメリットはあるが、多少不自然な文章と語彙選択を感じさせる。同様のアクティビティーをより自然な文章と語彙の選択によって構成したパラグラフを数多く作成し、それに即した音声を編集したものを用いて実施することができれば、一度だけのアクティビティーのみならず、何回かの授業で使用することができ、「国際語」としての英語の導入という目標の達成により効果があがるのではないかと思う。また、あらかじめ用意されたパラグラフを読んだものは、実際のコミュニケーションにおける自然な発話とは発音、イントネーション、スピーチスタイルすべての面で異なっている。同様な教材を自然な会話や実際に使用されるような文脈(例えば、空港や駅でのアナウンスなど)を想定して用意することができると有用であろう。これらは今後の課題として検討したい。

5. おわりに

「国際語」としての英語には当然それぞれの母語の影響が現れるのが普通であるが、それ

にまつわるイデオロギーを意識することも意義のあることであろう。授業時間に余裕があれば、アクセントにまつわるイデオロギーに言及できると国際社会における英語使用への理解がより深まるのではないかと思う。これだけ「国際語」としての英語が普及している現在においてもリッピー・グリーン（1997）に論じられているようにアクセントにまつわるイデオロギーは日本だけでなく一般に広く存在している。ネイティブスピーカー以外のアクセントをすべて「劣っている」とするイデオロギーも、また、一定の言語を母語とする話者の特徴的発音を「劣っている」とするイデオロギーも、英語を用いた国際コミュニケーション能力を培うためにはなんら有益なものではない。標準英語やアクセントのある英語に関しての様々なイデオロギーを知り、客観視出来るようになることは、学生が将来非母語話者として日本語アクセントのある英語を国際社会で使っていく上での健全な言語態度を培う助けとなるのではないだろうか。コミュニケーションスキルを身につけるには、英語学習者は日本語の影響（いわゆるアクセント）があっても、文法面で多少間違いがあったとしても、臆せずに使用し、その場その場での重要な情報が伝達できていれば、情報伝達のためにはそれほど重要でない細部にはこだわらないという態度が奨励される場面があってもよいであろう。

翻って、日本語を母語とする英語の母語話者ではない私たちがより円滑なコミュニケーションを英語で行うには、むろん正しい文法・発音を身に着けることは言うまでもなく大切であるが、大きな声で、はっきりとゆっくりと発音する、相手が自分の話していることを理解しているかどうかを随時確認しながら自分の話を展開していく、といった基本的なことがらが意外と重要であるということ、などを改めて学生と確認していく機会を提供できるのではないかと願っている。

最後に、近年では大学生向けの英語教材は多種多様なものが出版されているが、「国際語」としての英語を意識して、非母語話者による発話を取り入れたものはまだ数がそれほど多くはない。様々な学生のレベルとニーズにあった教材の今後のさらなる開発が期待される。

参考文献

- 矢野安剛 2004 『『外国語としての英語』から『国際語としての英語』へ：英語教育再考』『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第14号、179-195。
- Lippi-Green, Rosina. 1997. *English with an accent: Language, ideology, and discrimination in the United States*. London & New York: Routledge
- The speech accent archive*
<http://accent.gmu.edu/index.php>